

古今集の時代の和歌に用いられた「妹」ということばについて

水 谷 隆

The word “imo” used in waka poetry during the Kokinshu period

MIZUTANI Takashi

一、問題の発端と仮説の提示

本稿は古今和歌集の時代に「妹」という語がどのような意識で和歌に用いられていたのかについて検討を試みるものである。この語については、たとえば、

いも【妹】

上代において男から妻や恋人、さらに姉妹までを含めた親しい女性を日常的に呼ぶ称であったが、平安時代以降日常的には使用されず、もっぱら歌語として用いられていた。「刈菰の思ひ乱れて我が恋ふと妹知るらめや人し告げずは」（古今集・恋一・読人不知）などの『古今集』や『拾遺集』の読み

人知らず歌は古い時代の作かと思われるので別にしても、「花見ると家路におそく帰るかな待ち時過ぐと妹やいふらむ」（後拾遺集・春上・兼盛）「風に散る花橘に袖しめて我が思ふ妹が手枕にせむ」（千載集・夏・基俊）など数多くよまれているが、やはり古語的イメージを含んでいる感じである。

（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』）

のように、万葉集では「日常的に」用いられていたものが、平安時代以降、古風な歌語として歌に詠まれるようになったと考えられている。おおまかな流れとしては、肯うべきものであると思われる。

ただ、上に引いた『歌枕歌ことば辞典』にも引用されている古今和歌集の「苅り菰の」の「妹」について「万葉語」と評される¹

ことがあるように、この語は古今和歌集の時代、既に古語的な歌語になっていると考えられているようであるが、これについては少々疑問も残る。というのは、次の例が「妹」が古語であったと見たのではうまく説明できないと思われるからである。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ

過ぎにけらしな妹見ざるまに (伊勢物語二十三段)²

この歌の解釈に関しては、以前に私見を述べたことがあるが、そのうち、「妹」に関わる部分の概略を記す。

「妹」は、「結婚が成立した状態、もしくは結婚に至っていないくても当事者どうしの合意が必要である。」と指摘されるように、愛し合う女性に対して親しみをこめて用いるものであり、その思いがいまだ通じあっていない段階では、

妹と言はば なめし畏し

しかすがに 懸けまく欲しき 言にあるかも

(万葉集十二 二九一五 正述心緒)

のように、口にすることが憚られる表現だったとおぼしい。ところが、この「筒井つの」歌が贈られた時点では、まだ男女は恋人関係になかった。それなのに男は女を「妹」と呼んだのである。これは、「大人」になっていた男が、いわば照れ隠しのために

「自称には幼年期、幼な馴染と井戸端で遊んでいた時に、使い慣れていた口語「まろ」をそのまま和歌の中に用い」、幼時の親しい関係性を演出したものととして受け取ることができる。すなわちこの歌の「妹」も恋人を意味するのではなく、きょうだいのごとく「井のもとに出でて」遊んでいた日常生活の中で用いていた、親しい女兒に対する呼称をそのまま用いたものとおぼしい。

このように「筒井つの」歌は、幼時の日常会話を再現するかのとき口ぶりで仕立てられたものと考えられる。この歌に用いられている一人称「まろ」は、いちいちの例をここに示すことは控えるが、私的でくつろいだ場面でしか用いられないものであった。そうするとやはり、この「まろ」と対になるようにして用いられた「妹」のほうも、この当時、日常会話の中でも用いられる口頭語的な性格を持つ語であった可能性が十分に想定されるということである。

また、万葉集であれば多く用いられた「妹」という言葉が、古今和歌集では仮名序に引用されたものと墨減歌をも含めて六例のみであり、後撰和歌集でも同じく六例しか見えない。それが、拾遺和歌集になると万葉伝承歌を中心に二八例と急増し、千載和歌集以後の勅撰集では、当代歌人も用いうる歌語として定着している。この現象も、古今和歌集から後撰和歌集にかけての時期には、「妹」が未だ歌語にはなっていない口頭語的な性格をもつものであり、その結果、和歌に用いることがあまりなかったことを示しているのだとも考えられるだろう。

以上のような仮説に基づき、古今和歌集の時代の「妹」がどのような言葉として認識され、歌に詠まれていたのか、検討を続けたい。

二、古今和歌集中の「妹」について

今述べたように、古今和歌集中には「妹」を詠み込んだ歌が六首見られるが、そのうち五例は万葉集以来の古歌であると考えられる。以下、それらを順に確認する。

まず、仮名序に「なずらへ歌」の例として引用された

たらちめのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるか

いもにあはずて

は、

たらちねの 母が飼^かふ蚕^この 繭^{まごも}隠^いり いぶせくもあるか

妹に逢はずして

(万葉集 卷十二 2991)

という万葉集歌の伝えられたものであり、拾遺和歌集にも「人まろ」の歌として収められていることから、この当時、万葉集の時代の古歌として認識されていたはずのものである。

次の、

かりこもの思ひみだれて我こふと

いもしるらめや人しつげずは

(恋一 485 よみ人知らず)

も、

我が聞きに 懸けてな言ひそ

刈り薦の 乱れて思ふ 君が直^{ただ}香^かぞ

(万葉集 卷四 697)

妹がため 命残せり 刈り薦の 思ひ乱れて 死ぬべきものを

(同 卷十一 2764)

我妹子に 恋ひつつあらずは

刈り薦の 思ひ乱れて 死ぬべきものを

(同 卷十一 2765)

草枕 旅にし居れば

刈薦の 乱れて妹に 恋ひぬ日はなし

(同 卷十一 3176)

など、万葉集に特徴的に見られる枕詞「かりこもの」および被枕詞「乱れ」が用いられていることから、やはり古歌として認識されていた可能性が高い。

古今集の恋歌の巻軸歌、

流れては妹背の山のなかにおつるよしのの河のよしや世中

(恋五 828)

についても、「妹背(の)山」という言葉が

後れ居て 恋ひつつあらずは

紀伊の国の 妹背の山に あらましものを

(万葉集 巻四 544)

麻衣 着ればなつかし

紀伊の国の 妹背の山に 麻蒔く我妹

(同 巻七 1195)

大汝 少御神の 作らしし 妹背の山を 見らくしよしも

(同 巻七 1247)

など、万葉集に繰り返し用いられたものであり、これも直接の出典を万葉集に見いだすことはできないけれども、よみ人知らず歌であることも相まって、古今集の当時、古風な歌として認識されていたものと想像される。さらに、

水ぐきのをかのやかたに

いもとあれとねてのあさけのしものふりはも

(大歌所御歌 1072)

は、大歌所御歌であることから、古いわれを持つ歌であると認識されていたことが明らかである。

最後に、墨滅歌である

わざもこにあふさか山のしのすすき

ほにはいでもこひわたるかな

(墨滅歌 1107)

は、

我妹子に 逢坂山の はだすすき

穂には咲き出ず 恋ひわたるかも

(万葉集 巻十 2283)

という万葉歌の伝承されたものである。

これら古歌とおぼしい歌に「妹」という言葉が用いられていることから、この語も古語的なニュアンスを感じさせるものであったという可能性はある。しかし、それと同程度に、「妹」が万葉の昔から古今集の時代まで変わることなく使われている、古語ではない、通常の言葉だったという可能性も存するだろう。

そのような観点に立ち、次は古今集の時代の歌人による「妹」の歌を見てみたい。

となりよりとこなつの花をこひにおこせたりければ、
をしてみてこのうたをよみてつかはしける みつね

ちりをだにすゑじと思ふ

さきしよりのいとわがぬるとこ夏のはな

(夏 167)

は、隣家の求めを断るための歌であり、「相手がほへみをもつて許容し納得するように」⁹、あるいは「冗談を言っている」¹⁰ように歌われたものである。そのような趣向の歌にあえて古めかしい言葉として「妹」を用いたという可能性も無論、否定はできない。しかし、おそらくは躬恒の屋敷の庭に植えられていた常夏の花を分けてくれないかという隣家からの気遣いで日常的な依頼に対して、おどけた表現による断りの歌を返したものであり、躬恒は一首の雰囲気に対応しい、日常的に用いるありふれた言葉として「妹」を用いたという可能性も、十分に想定できるだろう。

三、古今和歌集に「妹」があまり見られないこと

本稿では、上のような仮定をするのだが、この仮定を補強するためには、なぜ古今集の時代の歌人たちは、「妹」という言葉を歌に詠み込むことがなかったのか。あるいは古今集に収載されるものがほとんどなかったのかについて説明する必要がある。「妹」が古今和歌集の当時、単に昔からあるありふれた言葉

だったのであれば、当代歌人たちが、万葉集と同様にしばしばこの語を歌に詠みこんでもよいはずだからである。

このことを考えるために、万葉集で「妹」が用いられた歌には顕著な特徴があることから示したい。有名な

天皇、蒲生野に遊獵みかりしたまふ時に額田王が作る歌

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

皇太子の答へたまふ御歌

紫草むらさきの にはへる妹を 憎くあらば

人妻ゆゑに 我あれ恋ひめやも

(万葉集 卷一 20・21)

は、現実の關係はさておき、歌に描き出された額田王と大海人皇子はぴったりと心を寄せ合っており、二人の意向も同じ方向を向いている。そのような表現になっているものと受け取られる。このような、男女間の気持がよりそい、通じ合い、意思疎通が十分にできている状態でこそ「妹」という言葉は発せられるのである。

次の例も同様である。

久米禪師、石川郎女を娉めとふ時の歌五首

み薦刈る 信濃の真弓 我が引かば

貴人うまひとさびて いなと言はむかも 禪師

み薦刈る 信濃の真弓 引かずして

弦はくるわざを 知ると言はなくに 郎女

梓弓 引かばまにまに 寄らめども

後の心を 知りかてぬかも 郎女

梓弓 弦緒取りはけ 引く人は 後の心を 知る人ぞ引く 禪師

東人の 荷前の箱の 荷の緒にも

妹は心に 乗りにけるかも 禪師

(万葉集 卷二 96～100)

は、「久米という法師が石川郎女という女性と結婚したときに交わした歌¹¹」であり、はじめに男が女に歌いかけた96番の歌は「第四句「貴人さびて」の底には相手の郎女を「貴人」ならぬ「女」とする認定がある。のっけからふざけているわけで、二人のあいだにはすでに親和の関係が成り立っている」というものである。このような状況の中、二人は歌を詠み交わす。それは、二人の心の交流に他ならない。そうして気持ちを確かに通じ合わせた後、男は「妹」は私の心にしっかりと乗ったことだと高らかに詠み上げる。これもやはり二人の愛情と意思疎通を前提とした表現なのである。

また、

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

あしひきの 山のしづくに 妹待つと 我れ立ち濡れぬ

山のしづくに

石川郎女、和へ奉る歌一首

我を待つと 君が濡れけむ

あしひきの 山のしづくに ならましものを

(万葉集 卷二 107/8)

この贈答は「言葉の上で、二人は今喧嘩をしている。楽しんでいなのだ。言葉の上でははぐらかしながら、あなたに添いたいというのが女の真意である。一首を得て、皇子の心にわきあがったものは喜び以外ではなからう」と評されるものである。「妹」という言葉はまさにそのような気持ちである場合に用いるべきものだったのではないか。

ここまで見たような「妹」の用い方は、時代が下っても、状況が異なっても、万葉集においては変わらない。たとえば大伴旅人・家持親子とも親交のあった大伴宿祢百代の「老いらくの恋」を主題とする仮装の歌¹²、つまり現実ではなく、仮想の恋を詠んだ歌

恋ひ死なむ 後は何せむ

生ける日の ためこそ妹を 見まく欲りすれ

(万葉集 卷四 560)

においても、これに応じた坂上郎女の歌に

黒髪に 白髪交じり 老ゆるまで

かかる恋には いまだ逢はななくに

(同 巻四 563)

と、気持ちの通じ合う熱愛が描かれることからして、同様の情愛の繋がり「妹」という言葉の前提になっていたことがうかがわれる。

さらに時代が下る例も示しておく。次は、かつて歌を交わしたことのある坂上大嬢に数年ぶりに大伴家持が贈った歌である。

大伴宿祢家持、坂上家の大嬢に贈る歌二首 離絶するこ

と数年、また会ひて相聞往来す

忘れ草 我が下紐に 付けたれど 醜しこの醜草しうくさ 言にしありけり

人もなき 国もあらぬか

我妹子と たづさはり行きて たぐひて居らむ

(万葉集 巻四 727/8)

何年たつても忘れられぬ「我妹子」と、手を取つてずっと寄り添つていたいという家持のメッセージは、もちろん、この歌を贈る時点では、女の気持ちを確認できておらず、家持の願望に過ぎない。しかし大嬢との交際は、そもそものがその母坂上郎女の願いによるものであり、家持にとってはいわば確信のある願望だったとおぼしい。したがって、大嬢の返歌にも、

玉ならば 手にも巻かむを

うつせみの 世の人なれば 手に巻きたし

(万葉集 巻四 729)

と、いつも一緒にいられぬことを嘆く、つまりは家持の「たづさはり行きて たぐひて」いたいという願いと同じ願いを持つていることが歌われるのである。

以上見てきたように、万葉集における「妹」という言葉は、原則として心の通じ合った男女関係の中でのみ用いられる言葉であった。

ところが、古今和歌集の恋の歌は、周知のように、その始まりの段階においては

逢ふ事はくもゐはるかになる神の

おとにききつつこひ渡るかな (恋一 482)

と、会うことも出来ぬ、当然心を通い合わせることもかなわない人への、募る思いが描かれ、そして

かりこもの思ひみだれて我こふと

いもしるらめや人しつげずは (恋一 485)

のように、思いを伝えるすべもない状態で高ぶっていく恋の思い

が示される。ようやく夢で逢えたとしても、

住の江の岸による浪よるさへやゆめのかよびぢ人めよくらむ

(恋二 559)

のように、思いが通じ合っているとは到底言えない段階が続く。
ようやく逢瀬を迎えても、

君が名もわがなもたてじ

なにはなるみつともいふなあひきともいはじ

(恋三 649)

と、まずは人目が気になる不安を口にしたりして、二人の気持ちが
が通じ合った喜びが描かれることはない。その後は、

うつつにはさもこそあらめ

夢にさへ人めをよくと見るがわびしさ

(恋三 656)

のように、次第に気持ち離れて行き始め、

いそのかみふるのなか道なかなかに

見ずはこひしと思はましやは (恋四 679)

と、結ばれたこと自体を後悔することすら生じる。以後の経過は省略するが、要するに、愛し合う二人の高ぶる気持ちの中で発せられる「妹」という言葉は、古今集の恋歌において、その場所が用意されていないのである。

万葉集に比べて古今和歌集の恋歌は、「実際の恋の場にある歌というよりは、一般にあるべき恋歌の表現とはこういうものであると提示してみせるものであった。」¹²ということがすでに指摘されている。実際の恋の場であれば、男女が、気持ちの通じ合う喜びを感じる時間も当然、あるだろう。そしてそのような時には、男は女のことを「妹」と呼ぶこともあっただろう。それに対して、古今和歌集の想定する「あるべき」恋とは、「目の前にない対象を求め慕う心情をいうが、その気持ちの裏側には、求める対象と共にいないことの悲しさや一人であることの寂しさがある。」¹³という、「恋」という言葉の意味通りのものであったのであろう。そのため、「妹」と呼びたくなるような思いは古今和歌集の恋歌において排除された。そのように考えるのが、自然であるように思われる。

なお、古今和歌集の恋歌に「妹」という言葉を詠み込んだ歌が二首存することは、先に見たとおりである。そのうち

かりこもの思ひみだれて我こふと

いもしるらめや人しつげずは

は、古歌故に古今集の恋歌に納められることが許容されたものと考ええるが、あるいは、一方的に思う女のことを「なめし畏し」という思いはあるものの、「懸けまく欲しき」(万葉集 巻十二 2915)という思いに耐えられず、「妹」と歌ったものともとれよう。さらに、この、「妹」を「きみ」とする伝本があることもまたまのことではないと思われる。この本文を伝える基俊本の正確な書写年代はわからないものの、筆写者の活躍した時代である12世紀はじめころには古今和歌集の恋歌として「妹」が用いられるのをやはり不自然に感じる人がいたことを示唆するのではないか。

また、

流れては妹背の山のなかにおつるよしのの河のよしや世中

の「妹背」は、深い男女関係を意味し、まさに「万葉集と同じニュアンスでもって用いられたものである。

四、古今和歌集ころの時代に詠まれた

「妹」について

ここまでのことを踏まえれば、古今和歌集で唯一の、同時代の歌人によって詠まれた「妹」を含む躬恒の歌が恋の歌でなかったことは、偶然によるものではないと考えられよう。この歌の「妹

と我が寝る床」は、先に説明した「妹」のニュアンスをいかし、二人の関係は第三者の介入を許さないほどに深く愛情で結ばれたものだとしていよう。そんな二人だけのための「とこ(なつ)」であるから、決してあなたに譲ることはできない、と、おおぎょうな表現に仕立てたのがこの一首だったのである。「妹」という言葉が男女間の深い愛情関係を意味するものだったからこそ、現実の恋愛とは縁遠い、恋歌が交わされる可能性のない場面において冗談めいたやりとりで用いることができたのである。

実は、後撰和歌集においても同様の事が指摘できる。まず確認したいのは「妹」という言葉が用いられた歌が、みな恋歌ではないということである。後撰和歌集に至っても「妹」という愛情が確立した場で用いる言葉は「恋」歌に似つかわしくないと考えられていたのであろう。また付言すれば、それぞれの歌の「妹」は、古歌の表現をそのまま利用したとおぼしいものはさておき、愛情の深さというニュアンスをうまく利用したものであると考えられそうである。その点につき、以下、具体的に確認していく。

梅花よそながら見む

わぎもこがとがむばかりのかにもこそしめ

(後撰和歌集 春上 27 題知らず・よみ人知らず)

これは、梅の花の香りを賞賛するものである。現実には梅の花の香りが衣に染みて、それを浮気の証拠と見とがめられることは考え

にくいが、しかしそれを大げさに「我妹子」がとがめるといけな
いからねと、のろけるような冗談に仕立てのである。これも「妹
(我妹子)」が、深く愛し合っている女性を意味するからこそ、効
果的なおどけの表現になるのである。

かよひすみ侍りける人の家のまへなる柳を思ひやりて

みつね

いもが家のはひいりにたてるあをやぎに今やなくらん鶯の声

(後撰和歌集 春上 41)

は、同じく春の歌である。青柳と鶯への懐かしさ、見たさ聞きた
さが、「妹」の家にあると表現されることで一層強調されている
と見ることができよう。

いもがひもとくとむすぶとたつた山今ぞ紅葉の錦おりける

(後撰和歌集 秋下 376 よみ人知らず)

は、

妹が紐 解くと結びて 龍田山

今こそそもみち そめてありけれ

(万葉集 卷十一 2211)

という万葉歌の異伝とおぼしい古歌をそのまま収めたものと思わ
れるが、当時の人々にとっては、愛おしくかつ日頃から交渉のあ
る女性の下紐をイメージすること、で、「紅葉の錦」の美しさが印
象的にうつった可能性も十分に考えられる。

はらからどちいかなることか侍りけん よみ人知らず

君と我いもせの山も秋くれば色かはりぬる物にぞありける

(後撰和歌集 秋下 380)

この歌は、「うつほ物語の仲澄とあて宮のように、愛し合ってし
まった実の兄(または妹)が他の人に心を移したのを怨んでの詠
という設定」であるが、「妹背の山」という言葉は、古くからの
常套的表現であるけれども、やはり、私たちはあんなにも愛し合
っていたのに、という気持ちに込められたものと見るべきであ
る。

(題しらず)

つらゆき

うちむれていざわぎもこがかがみ山

こえてもみぢのちらんかげ見む

(後撰和歌集 秋下 405)

の「我妹子が鏡山」は、

わぎもこががみの山のもみぢ葉の

うつるときにぞものはかなしき

(家持集 266)

など、古歌以来の表現をそのまま用いたものである可能性があるが、「うちむれていざ」見に行こうと、人々に強く行楽を呼び掛ける先である「鏡山」への強い愛着を「妹が」という言葉で表現したものと理解する可能性がある。

はらからのなかにいかなる事かありけん、つねならぬさ

まに見え侍りければ

よみ人しらず

むつまじきいもせの山の中にさへ

へだつる雲のはれずもあるかな

(後撰和歌集 雑三 1214)

は、先の秋下380番の歌と類似する状況下でのものである。これも「妹」という言葉から読み取れる愛情の深さというニュアンスを強く読み取ってこそ、裏切られた者の悲痛がよく伝わるものになる。

以上、後撰和歌集で「妹」という言葉の用いられた歌は、「恋歌」に分類されないこと、同時に深い愛情を前提とした表現とおぼしいことを見てきた。このことは古今集の時代から変わらないものと考えて良からう。

五、「妹」が歌語になる経緯

古今和歌集から後撰和歌集にかけての時代に、「妹」が上記のように考えられていたとして、勅撰和歌集で言えば、千載和歌集から状況が変わる。

すでに言及したとおり、拾遺和歌集において、「妹」という言葉を詠み込んだ歌の数が増加し、恋歌としてもおさめられている。しかしそれらは、すべて万葉集歌の伝承されたものであること、次に示す通りである。

しかのあまのつりにともせるいさり火の

ほのかにいもを見るよしもがな(恋二 752)

志賀の海人の 釣りし燭せる 漁り火の

ほのかに妹を 見むよしもがも

(万葉集 卷十二 3170)

磯神ふるとも雨にさはらめやはむといもにいひてしものを

(恋二 765 大伴方見)

石上 降るとも雨に つつまめや

妹に逢はむと 言ひてしものを

(万葉集 卷四 664)

あしひきの山こえくれてやどからば

いもたちまちていねざらむかも

あしひきの 山行き暮らし やど借らば
(恋三 781 石上乙麿)

妹立ち待ちて やど貸さむかも

(万葉集 卷七 1242)

むばたまのいもがくろかみ

こよひもやわがなきとこになびきいでぬらん

(恋三 802)

ぬばたまの 妹が黒髪

今夜もか 我がなき床に 靡けて寝らむ

(万葉集 卷十一 2564)

まさしてふやそのちまたにゆふけとふ

うらまさにせよいもにあふべく

(恋三 806 ひとまろ)

言霊の 八十の衢に 夕占問ふ

占まさに告る 妹は相寄らむ

(万葉集 卷十一 2506)

みな月のつちさへさけててる日にも

わがそでひめやいもにあはずして

(恋三 825)

六月の 地さへ裂けて 照る日にも

我が袖干めや 君に逢はずして

(万葉集 卷十 1995)

ちりひぢのかずにもあらぬ我ゆゑに

思ひわぶらんいもがかなしき

(恋四 872)

塵泥の 数にもあらぬ 我ゆゑに

思ひわぶらむ 妹がかなしき

(万葉集 卷十五 3727)

たらちねのおやのかふこのまゆごもり

いぶせくもあるかいもにあはずして

(恋四 895 ひとまろ)

たらちねの 母が飼ふ蚕の 繭隠り

いぶせくもあるか 妹に逢はずして

(万葉集 卷十二 2991)

よそに有りてくもゐに見ゆるいもが家に

早くいたらむあゆめくろこま

(恋四 910 ひとまろ)

遠くありて 雲居に見ゆる 妹が家に

早く至らむ 歩め黒駒

(万葉集 卷七 1271)

こひてしねこひてしねとや

わぎもこがわが家の門をすぎてゆくらん

(恋五 936 人まろ)

恋ひ死なば 恋ひも死ねとか

我妹子が 我家の門を 過ぎて行くらむ

(万葉集 卷十一 2401)

詳しくは稿を改めて検討したいと思うが、このように、「妹」という言葉が詠み込まれた古歌が、恋の歌として多く流通しているうちに、本来のニュアンス——相思相愛の相手にしか用いぬ——が忘れられていったのではないか。後拾遺和歌集から詞花和歌集までは、恋歌に「妹」という言葉は見られないのだが、千載和歌集にいたり、

いもがあたりながるる川のせによらば

あわとなりてもきえんとぞ思ふ

(千載和歌集 恋二 763 刑部卿範兼)

隔河恋といへるころをよめる 前右京権大夫頼政

山しろのみのさにといもをおきて

いくたびよどに舟よばふらん

(千載和歌集 恋四 887)

と、当代歌人の手になる「妹」を詠み込んだ歌が恋歌として収められるようになるのが、その証左と考えたい。無論、私家集等の資料を確認しなければ詳細を明らかにすることはできないものの、院政期にいたり、少なくとも勅撰和歌集の「恋」の歌に「妹」が詠まれうるようになったこと、つまり、「妹」という語の、相思相愛の心が通じ合った状態で用いるもの、という万葉集以来の意味がここに来て失われ始めていることを、これは示すのだろう。言い換えると、この時期になって「妹」は本来の意味用

法からずれを生じた、すなわち、古語的な言葉となったのではないか。

注

- 1 片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社 一九九八年）
- 2 伊勢物語の本文は新編日本古典文学全集による。
- 3 拙稿「伊勢物語二十三段「筒井つ」の歌の解釈について」（追手門学院大学人文学紀要第3号（令和七年））
- 4 『古典基礎語辞典』（角川書店 二〇一一年）
- 5 万葉集の本文は伊藤博『万葉集釋注』の訓読文による。
- 6 竹岡正夫『伊勢物語全評釈』（右文書院 一九八七年）
- 7 勅撰和歌集の本文は新編国歌大観による。
- 8 万葉集歌第三句は原文「皮為酢寸」である。現在はこれを「はだすき」と訓むが、寛永版本以前は「しのすき」と訓んでいたこと、片桐『古今和歌集全評釈』の説く通りである。
- 9 竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（右文書院 一九七六年）
- 10 注1に同じ。
- 11 伊藤博『万葉集釋注』。以下、万葉歌の解説の引用は原則として同書による。
- 12 菊池靖彦『古今的世界の研究』（笠間書院 一九八〇年）
- 13 日本国語大辞典第二版「恋」の項「語誌」より。
- 14 新日本古典文学大系『後撰和歌集』脚注